

障害に負けるな

工藤 努

私は、札幌学院大学社会情報学部三年の聴覚障害の工藤努です。自身の二十一年間を振り返ってみると、時の経つことが実に早かったように思えてきています。この間色々な人との出会いによって、やはり自分は成長したんだとつくづく感じることも多くあります。

さて、私は難聴という障害を持って生まれました。そして幼稚園、小学部、中学部の十二年間を聾学校で色々と学んでいき、将来のために健常者として接したいという気持ちが強かったことから普通の高校へ三年間通学し、そして現在本学在学中であります。

「講義保障」ボランティアを支えられて

ところで、本学に聴覚障害生のために講義保障をするボランティアが存在することを初めて知ったのは、入学前のことでした。それは私が入学する前に私と同じく二年先輩の聴覚障害生が本学に在学したということであって、前からノートテイク制度が取り組まれていたからで

す。入学後初めての講義にノートテイクをつけてもらいましたが、教授の講義内容が想像以上に濃い内容であったので、ノートテイクをしてもらったおかげで講義内容を理解することができました。

ノートテイクなしで講義の話を聞くということは私のような聴覚障害生にとっては不利だと初めて感じさせられました。

ここで聴覚障害生に対する講義保障とは何かについて説明していきたいと思えます。私のような聴覚障害生は、音声によって伝えられる大学の講義を聴くことが出来ません。一対一のコミュニケーションでは、ある程度口話や筆談で取れるのですが、大教室で九十分間、教授の唇の動きを読み取ることはほとんど不可能です。そして、板書や教科書のあった高校までとは違い、教授の話すことが中心となる大学の講義では、私のような聴覚障害生にとっては全くわからないものです。そのような聴覚障害生の状態に対して、ノートテイクもしくはPC通訳などをを用いて講義を「聴く権利を保障する」

こと、これを「講義における情報保障」、つまり「講義保障」といいます。

その講義保障として札幌学院大学では、ノートテイクとPC通訳の二つの方法があり、ノートテイクとは、発言者の音声言語を文字に変えて伝える通訳方法で、「筆談通訳」「要約筆記」などと呼ばれます。話し言葉の速度はアナウンサーで一分間に三五〇〜四〇〇文字程度、これに対して書く速度は七〇〜一〇〇文字程度です。したがって、ノートテイクによって伝えることのできる情報は、話されている内容の五分の程度にしかすぎないのです。限られた情報量の中で、いかに効率よく伝えるかがノートテイクとしての力量となるのです。次にPC通訳とは、ノートテイクと違って、パソコンのタイピングが速ければ速いほど、手書きよりも講義の内容をより多くカバー出来ます。目安としては、一分間に一、〇〇〇文字ほど打てればほとんどの講義に対応出来ます。

私は日頃のノートテイク、又はPC通訳を通じて、人間的に成長したと思います。その中で例を一つ挙げるとしたらボランティアについてです。酪農学園大学や浅井学園大学にはノートテイクもしくはPC通訳に対する報酬があります。本学には私が大学一年生の時までは何もありませんでした。つまり、ボランティアという形に頼らざるを得なかったのです。そのような条件下で一講義九十

くどう つとむ
社会情報学部社会情報学
科三年
硬式野球部所属

分間もしくは四十五分間テイク作業を毎回続けることはどれほどの苦労があるのか、毎日テイクを受ける側の私は誰よりも知っています。それでも、テイカーの誰もが自分の受け持つ講義を最終回まで続けてくれたのですから、その姿勢に感服させられました。それに對し、私はテイカーに何をしてあげられるのだろうか、こんな他力本願な立場から抜け出したいという思いで日々悩み続けてきたものです。

テイカーの誰に聞いても「単位を取ってくればいい」「テイクが好きだからやっている」「他の学部の特科科目に興味がある」「勉強になる」など、ほとんどがそういった返答でした。私にはわかるようにわからない返答に自身で出した答えは、とにかくその苦労に報いるためにできるだけ多くの単位を取ってテイカーに胸を張って報告したいということでした。今でもこれが正しい答えかどうかはわかりませんが、とにかく信じていきたいと思っています。このようにして現在までの三年半間共に歩んできたテイカーから色々な事を教えられました。来年の卒業まで残り一年半となりましたが、ノートテイカーもしくはPC通訳者と共にお互いに友情がより深まるようにしていきたいものです。

特別扱いしない硬式野球部

テイカーだけではなく、課外活動を通

じて監督や顧問、そして部員と関わることによって人間的に成長したと思います。現在、硬式野球部に所属しており、

現在に至るまで、大学野球でリーグ戦でのベンチ入りや、試合に出場するという経験もさせてもらいました。高校までとは違っているかに高い大学野球のレベルの違いを見せられました。また大学では、授業上の関係から平日は全員が揃うことは難しいため、それぞれ個人の自主練習という方法でやっています。そのために逆に高校時代より練習量が少ないということもあります。自主的であればあるほど、チームに対しての責任だったり自覚だったりという部分が必ず相対的に起きることを忘れてしまいがちとなり、考え様によつては厳しい部といえるでしょう。こんな厳しい部ではありますが、私は気を抜けないほど頑張らなければならぬと思いつづけながら現在でも活動をしております。硬式野球部にはほとんどが健常者で私のような聴覚障害生が一人しかいません。確かに周囲の人達とのハンディキャップがありますが、大学入学までに健常者と共に色々経験してきたことを生かしてやっています。私が障害者であることを周囲の人達が理解してくれ、障害者だからといって特別扱いされることがないということが何よりも嬉しかったと思います。練習や試合の時でも、皆と一緒に汗をかきながら、健常者に負けたくないという気持ちをより持ちながら頑

張っています。

早いもので大学も残り一年半となりましたが、私のような聴覚障害生は健常者よりもハンディキャップがあるけど、書くことも、見ることも、考えることも出来るのだから、それを大切にして、将来に障害者の子供達に野球を指導したいという夢を実現させる為に一つ一つ上を目指して、さらに「自分が耳が聴こえないから何も出来ないんだ。」とは思わずに、耳が聴こえなくても、努力すれば、必ず成功するということを信じて、これからも一杯頑張っていきたいと思います。たとえ、耳が不自由であっても、目もあるし、口もあるし、手もあることを忘れずに、誰も憎まずに、みんなと仲良く、今まで見守り育ててくれた両親や恩師に感謝しながら生きていこうと思います。最後になりましたが、講義保障にあたって協力して下さった先生方や職員の方、そしてボランティア学生に感謝したいと思います。



硬式野球部の仲間と（2列目左端が筆者）